

中国語の談話標識“应该说”の成立に見られる （間）主観化とテキスト化

朱, 冰
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7410600>

出版情報：言語文化論究. 56, pp.23-31, 2026-03-18. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



中国語の談話標識“应该说”の成立に見られる (間) 主観化とテキスト化

朱 冰

1. はじめに

中国語の一部の法助動詞は、動詞と結びつくことにより、談話標識へと転成することがある。束縛的必然性 (deontic necessity) を表す“应该” (「～すべきだ」) と発話動詞“说”の組み合わせに由来する“应该说”は、その一例である。¹ “应该”と“说”の結合は、(1) のように「～(と) 言うべきだ」という束縛的意味を表す (以下“应该+说”)。一方で、(2) のように談話標識機能を持つ文副詞的要素に変化し、ひとまとまりとして話し手の認識的判断や立場を示すようになる (以下“应该说”)。²

- (1) 他 应该 说：“我 不 知道，我 找 一下 答案 告诉 您。”
彼 べきだ 言う 私 否定 知る 私 探す ちょっと 答え 教える あなた
『『わかりません。ちょっと調べてからお答えします』と彼は言うべきでした。』
(CCL・現代)

- (2) 李敖：应该说， 感受 和 以前 是 不 一样 的。
人名 べきだ-言う 感じ と 以前 コピュラ 否定 同じ 文末助詞
『李敖『（それは）以前の感じと違うと思います。』』
(CCL・現代)

“应该说”の談話機能について、朱 (2018) は Kaltenböck et al. (2011) が提案した談話が行われる状況 (situation of discourse) を特徴付ける要素を援用し、「話し手の態度 (attitudes of the speaker)」、「話し手と聞き手の相互行為 (speaker-hearer interaction)」、および「テキスト構成 (text organization)」の3側面から記述している。これらの側面は、Traugott (2022, 2024) が英語の談話構造化標識 (discourse structuring markers) を分析する際に再定義した「主観化 (subjectification)」、「間主観化 (intersubjectification)」、および「テキスト化 (textualization)」という三つの通時的プロセスと密接に対応していると考えられる。さらに、Traugott (2022, 2024) は、この三つのプロセスが同等の地位を持ち、相互に関連しながら同時に生じ得ることを指摘している。本稿では、こうした最近の議論を踏まえつつ、“应该说”の成立過程に見られる主観化・間主観化・テキスト化を検討する。その上で、三者が時間的にも機能的にも重なり合いながら進行するという Traugott の主張を支持する事例として、“应该说”を位置づけ得ると主張する。

本稿は次のように構成される。第2節では、本研究の理論的枠組みを紹介し、本稿で採用する主観化・間主観化・テキスト化の定義を明確にする。第3節では、通時的なコーパス調査に基づき、“应该说”の成立過程をたどりながら、その中に見られる三つの通時的プロセスを分析する。最後に第4節では、本論の内容を総括し、今後の課題を示す。

2. 理論的枠組み

(間)主観化はしばしば文法化に伴って生じる意味変化の一種であり、Traugottはその歴史的順序に関して、主観化と間主観化の間に一方向的な仮説を提示している (Traugott and Dasher 2002; Traugott 2003, 2010)。この枠組みにおいて、「主観性 (subjectivity)」は話し手／書き手 (SP/W) の命題内容に対する態度を指し、「間主観性 (intersubjectivity)」は談話の能動的な参与者としての聞き手／読み手 (AD/R) に対する話し手／書き手の注意を指す。この区別に基づき、Traugott は意味変化の方向性に関して次のような一方向性仮説を提示している。

(3) non-subjective > subjective > intersubjective

(Traugott 2003: 134)

Traugott (2003) によれば、この仮説は必ずしも発達の必然的な経路を示すものではなく、あくまで可能なパターンの一つにすぎない。すなわち、逆方向の変化は想定されないという一般的な傾向を示すものである。なお、Traugott の主観性の概念には、テキストの意味の要素も含まれている。たとえば、英語の *while* が時間の意味から譲歩の意味へと発展した過程は主観化の一例とされるが、これは譲歩的用法が話し手／書き手による命題間の関係性の知覚を反映しているためである。最近、Traugott (2022, 2024) は主観化・間主観化を再定義しているが、その基本的立場は従来の見解とおおむね一致している。以下にその定義を示す。

- (4) a. **Subjectification** is increase in the degree to which SP/Ws overtly base meanings in and orient them toward their own perspective.
- b. **Intersubjectification** is increase in the degree to which SP/Ws overtly pay attention to AD/Rs and orient meanings toward AD/Rs' cognitive stances and social identities.
- c. **Textualization** is increase in the degree to which SP/Ws pay overt attention to text-creation and invite AD/R to interpret textual relationships.

(Traugott 2022: 197)

まず主観化に関して、本稿は *while* の譲歩的用法が話し手／書き手による命題間関係の認識を反映しているという点を否定しないものの、より限定的な定義を採用する。すなわち、主観化を話し手／書き手の視点からの判断や評価を明示的にコード化する方向への意味変化として限定的に捉える。このような限定は、(4c) のようにテキスト化を独立した過程とみなす場合に重要である。時間的用法であれ、譲歩的用法であれ、*while* のような接続詞は、主としてテキストの一貫性 (coherence) を高めるテキスト的機能を果たすと考えられる (Narrog 2012a: 37-38)。

次に、間主観性に関して、本稿では Ghesquière et al. (2012) が提案する「態度的間主観性

(attitudinal intersubjectivity)」と「応答的間主観性 (responsive intersubjectivity)」を区別する間主観性の類型論を援用する。日本語の対者敬語（例：「～ます」、「～です」）のように、聞き手との関係や聞き手のフェイス・社会的地位などに対する話し手の配慮をコード化する表現は、態度的間主観性を表すものとしている。英語の付加疑問文（例：*isn't it?*）のように、談話の進行・継続を保つために聞き手に何らかの応答や行動を誘発する効果を持つ表現は、「応答的間主観性」を表すものとしている。本稿では、間主観化を、意味がこれら二種類の間主観性をコード化するように変化する通時的プロセスとして捉える。

最後に、テキスト化について述べる。Traugott (2022) は、テキスト化を独立した変化プロセスとして位置づけており、その捉え方は、Ghesquière et al. (2012) が提案した間主観性の類型論の中で同定された「テキスト的間主観性 (textual intersubjectivity)」に類似している。Ghesquière et al. (2012) は、Diessel (2006) が提示した「共同注意 (joint attention)」の概念を発展させ、焦点化・背景化を担う表現（例：指示詞）などが、話し手と聞き手の間に共同注意を形成し、聞き手を特定の指示対象に注意させたり、テキスト内部の関係を解釈させたりする点において、間主観的でもあると論じた。さらに、Traugott (2024: 8) は、Halliday and Hasan (1976) のテキストの結束性 (textual cohesion) の分類に基づき、「指示対象追跡のテキスト性 (referent-tracking textuality)」と「連結的テキスト性 (connective textuality)」を区別している。(4c) に示されたテキスト化の定義が関わるのは後者のみであり、すなわち、テキストの一貫性を明示的に示し、テキスト単位間の結束を確立する言語表現の出現を指している。一方、指示対象追跡のテキスト性は、通常、照応表現（例：*she, they*）や直示表現（例：*this, that*）によって表されるものであり、Traugott (2022) が定義するテキスト化の射程には含まれない。本稿はこの視点に概ね賛同し、テキストの意味を表す表現に内在する間主観的側面、特にテキスト単位間の関係性を解釈する際に聞き手／読み手を導く役割も認識する。

以上を踏まえ、本稿における「主観化 (subjectification)」、「間主観化 (intersubjectification)」、「テキスト化 (textualization)」の定義は、(5) に示すようにまとめられる。

- (5) a. **主観化**：話し手／書き手の視点からの判断や評価を、より明示的にコード化する方向への意味変化。
- b. **間主観化**：聞き手／読み手との関係や聞き手／読み手のフェイス・社会的地位などに対する話し手の配慮（態度的間主観性）、または談話の進行・継続を保つために聞き手／読み手に何らかの応答や行動を誘発する効果（応答的間主観性）をコード化する方向への意味変化。
- c. **テキスト化**：テキストの一貫性やテキスト単位間の結束性（連結的テキスト性）をコード化する方向への意味変化。

3. “应该说”の成立と主観化・間主観化・テキスト化

本節では、朱 (2018) による通時的なコーパス調査に基づき、“应该说”の成立を振り返りながら、その主観化、間主観化、およびテキスト化を考察する。

3.1 主観化：「言うべきこと」から「『私』が思うこと」へ

“应该+说”という意味上の合成性が高い統語構造は、(6) のように束縛的意味（「～（と）言う

べきだ」)を表すほか、そのように発話することが適切であり、必要であるという話し手の認識的判断も語用論の意味として含意される(陸・賀 2015: 81も参照)。

- (6) 你那管事的就**应该说**：“人命实不是我家害的，(略)”

「その人は確かに我々側が殺したのではなくて(略)とそちらの管理人は言うべきだった。」

(CCL・『老残游記』，19世紀末～20世紀初頭)

陸・賀(2015: 81)が指摘するように、発話動詞の補文は具体的な発話内容(例(6))の代わりに、(7)のように一般的な命題内容となる場合、話し手による認識的判断という語用論の推論が一層強化される。つまり、命題内容が真であると話し手が考えているということを推論できる。

- (7) 贵使者的话，自是正理，姁娥是**应该说**她有罪的。

「使者さまのお話は当然ごもっともで、姁娥は有罪であると言うべきです。」

(CCL・『上古秘史』，20世紀初頭)

話し手の認識的判断を表す一語化した“应该说”は、19世紀末～20世紀初頭頃から次第に現れ始め、話し言葉(例(2))および書き言葉(例(8))の両方に見られる。

- (8) a. 德清道：“**应该说**你是个薄情人。原先我们一辈姐妹是何等亲热，尤其紫榭、香菲你们三个人，和睦相处谁能比得上？你成了亲以后，就不提旧事儿了。她二人竟遭受了多少个艰难苦楚呢？”

「德清は『あなたは薄情人ですね。昔我々姉妹はなんとも仲睦まじかったことか。とりわけ紫榭と香菲、あなたたち三人の仲の良さといったら、誰にも負けなかったでしょう？ところが、あなたは結婚してからというものの、昔のことなど口にも出さなくなった。あの二人がどれだけの苦難や辛い思いを味わってきたか、あなたはご存じなのですか？』と言った。」

(BCC・『泣紅亭』，19世紀末)

- b. **应该说**这是一间陋室，屋里的一切都显出主人好体面，(略)

「これは粗末な家だと言うべきだ／思われる。部屋の中にあるすべてのものはどれも主人が体面を重んじていることを示している。(略)」

(CCL・『日の出』，1935年)

英語をはじめとする諸言語における法助動詞の発達が示すように、束縛の意味から認識の意味への変化は、話し手／書き手の内的判断や評価をコード化する典型的な主観化のプロセスである(e.g., Sweetser 1990, Traugott 1995)。同様に、束縛の意味を表す“应该+说”から、話し手／書き手の認識的判断を表す“应该说”へのシフトも、平行的な変化として捉えることができ、主観化の進行が認められる。

3.2 間主観化：断定回避のヘッジ表現へ

朱(2018: 202)は、“应该说”は命題の真理条件に関与しないため、削除しても文の自然さに影

響はないが、それを付加することによって命題の真偽に対する断定を回避し、話し手／書き手が自らの主張を和らげることができると指摘している。すなわち、“应该说”は断定回避のヘッジ表現としても機能している。

- (9) 德清道：“{应该说／Ø} 你是个薄情人。原先我们一辈姐妹是何等亲热，（略）”

『あなたは薄情な人ですね。昔、我々姉妹はなんとも仲睦まじかったことか。（略）』と德清は言った。」

（BCC・『泣紅亭』19世紀末；(8a)を再掲）

(9) が示しているように、“应该说”の使用により、話し手は自分の主張を緩和しつつ、聞き手のフェイスに配慮するという効果が生じるといえる。言い換えれば、“应该说”は態度的間主観性を帯びようになり、その結果、間主観化のプロセスも進展していると考えられる。

3.3 テキスト化：結論や話題を提示するマーカーへ

一語化した“应该说”は、話し手／書き手の認識的判断や聞き手への配慮を表す機能を獲得しているだけでなく、テキストの一貫性にも貢献しており、主として結論提示や話題提示といったテキスト的機能を果たしていると観察される。たとえば、李・王（2011：284）の指摘に見られるように、“应该说”は(10)のように前の談話内容を要約・評価する内容を提示することができる。

- (10) (略) 用哈耶克的话说，这是一种“自发式扩展型人类秩序”，其中所体现的人类理性不是以建构某种特定的社会目标为特征的所谓“构成论理性主义”，而是在自发活动中不断纠错的所谓“进化论理性主义”。**应该说**，这是资本主义几百年发展道路的真实写照。

「(略) ハイエクの話で言えば、これは一種の『自发式拡張型の人間秩序』であり、その中に示された人間の理性は、ある特定の社会目標を構築することの特徴とする『構成論的な理性主義』ではなく、自发活動において絶えず誤りを訂正するいわゆる『進化論的な理性主義』である。**[应该说]** これは資本主義の数百年にわたる発展の道筋に対する真実の描写であると言わなければならない。」

（CCL・現代）

また、朱（2018：201）が指摘するように、(10)のように前述の内容を要約する用法のほか、(11)のように結論を先に提示し、その後具体的内容を展開する用法も確認できる。このような用法における“应该说”は、新しい話題を導入するテキスト的機能を担っていると考えられる（陸・賀 2015：82も参照）。

- (11) 杨澜：其实**应该说**，陈家洛的身上也反映了您当时在年轻时代书生时代很多的理想在他的身上。

你看他又是一个富家的公子啊，又能文又能武，又很维护着正统是吧？各个方面都那么的完美，在这之后好像没有一个英雄是像陈家洛这样来写的，从身世上各个方面来这样写的了。

「楊瀾『実は **[应该说]**、あなたが若い時の多くの理想は陳家洛の身にも反映されていると考えています。彼もお金持ちの子ですし、文武両道で、しきたりも守っているでしょう。どの面をみてもあんなにも完璧です。その後、陳家洛のように、身の上などいろいろな側面から

描かれた英雄はもういなかったようです。』

(CCL・現代)

以上の観察から、“应该说”は連結的テキスト性を獲得し、テキスト構成に積極的に寄与するようになった点で、テキスト化が進行していると言える。

3.4 主観化・間主観化・テキスト化の関係

第1節で触れたように、Traugott (2022, 2024) は、この三つのプロセスが同等の地位を持ち、相互に関連しながら同時に生じ得ることを指摘している。“应该说”の状況は、この指摘に当てはまるだろうか。まず、“应该说”が話し手／書き手の認識的判断を示すマーカーとして成立した際、主観化がすでに生じ、それと同時にヘッジ表現としての機能を獲得し、間主観化も進行していると考えられる。すなわち、“应该说”の成立における主観化と間主観化が相補的に進展しつつ、互いに強化し合う形で並行して生じていると言える。

さらに、“应该说”のテキストの機能も、“应该说”が現れた初期から観察される。たとえば (8a) では、徳清がまず“应该说”を用いて「あなたが薄情な人だ」という結論を提示し、その後に具体的な根拠を述べている。このことから、“应该说”が早い時期からテキスト組織の中で特定の位置を占め、テキスト単位間の結束性を明示する方向へと機能を拡張していたと考えられる。すなわち、“应该说”のテキスト化は、その成立初期の段階においてすでに生じていたと推測できる。そして、この用法は現代語においても頻繁に観察される (例 (10)、(11))。

一方で、“应该说”の成立初期に属する用例は限られており、主観化・間主観化・テキスト化という三つのプロセスの関係を量的分析によって明確に示すことは容易ではない。しかしながら、これまでの観察を踏まえると、“应该说”の成立過程は、主観化・間主観化・テキスト化が時間的にも機能的にも重なり合いながら進行するという Traugott (2022, 2024) の主張を支持する事例として位置づけることができよう。

4. おわりに

本稿では、Traugott の近年の議論を踏まえ、筆者がこれまでに行った中国語の談話標識“应该说”の成立に関する通時的分析 (朱 2018) を、主観化・間主観化・テキスト化の三側面から再検討した。その結果、これら三つのプロセスは明確な順序で段階的に生じたというよりも、むしろ互いに重なり合いながら並行的に進行していた可能性が高いことが示唆された。

Traugott が提示している主観化と間主観化に関する (3) のような方向性仮説は、意味・語用変化を理解し分析するうえで強力な理論枠組みを提供しており、その説明力は通言語のデータによって裏づけられてきた。しかし、Traugott (2022: 197) が最近の研究で認めるように、主観化・間主観化・テキスト化は「メカニズムではなく、意味が時間の中で使用され再解釈されていく過程」であり、それらを固定的な方向性の体系に位置づけようとする自体が適切でない可能性がある。この点を踏まえるなら、これら三つのプロセスは意味・語用変化の副次的現象として捉える方が妥当であり、その生起順序もあらかじめ決定されているのではなく、可変的であると考えべきであろう。Narrog (2012, 2015) は、モダリティの意味変化を説明するために提案した「発話行為指向性 (speech-act orientation)」という理論枠組みにおいて、すでにこれと類似した見解を示している。

Narrog は発話行為指向性を「話し手指向 (speaker-orientation)」、「聞き手指向 (hearer-orientation)」、「テキスト／談話指向 (text/discourse-orientation)」の三つに区分しており、これらは本稿で論じた主観化・間主観化・テキスト化の概念におおむね対応する。重要なのは、これら三つの下位傾向が順次的に生じるのではなく、互いに独立して作動する点である。今後は、他の談話標識の成立過程についても検討を広げることで、主観化・間主観化・テキスト化の相互関係をさらに明確にしていくなが必要がある。

注

- 1 他には、“可以”（「～してもいい」）と発話動詞“说”からなる“可以说”、“要”（「～しなければならない」）と動詞“知道”（「知る」）からなる“要知道”が挙げられる。
- 2 本稿で用いる例文は、特に断りのない限り、朱（2018）に拠る。使用するコーパスの略語は以下の通りである：CCL (Center for Chinese Linguistics Corpus, Peking University)、BCC (Beijing Language and Culture University Corpus)。

付 記

本研究は JSPS 科研費若手研究 22K13116 「テキストの意味と間主観的意味の連続性と相互拡張」(研究代表者：朱 冰) の支援を受けている。

参 考 文 献

- Diessel, Holger. 2006. “Demonstratives, Joint Attention and the Emergence of Grammar.” *Cognitive Linguistics* 17: 463-489.
- Ghesquière, Lobke, Lieselotter Brems and Freek Van de Velde. 2012. “Intersubjectivity and Intersubjectification: Typology and Operationalization.” *English Text Construction* 5(1): 128-152.
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Kaltenböck, Gunther, Bernd Heine and Tania Kuteva (2011). On thetical grammar. *Studies in Language* 35(4): 848-893.
- Li, Zongjiang (李宗江) and Huilan Wang (王慧兰). 2011. *Hanyu Xin Xuci* [The New Grammatical Words in Chinese]. Shanghai: Shanghai Educational Publishing House.
- Lu, Ping (陆萍) and Yang He (贺阳). 2015. Shilun “keyishuo” he “yinggaishuo” de yitong [A contrastive analysis between keyishuo and yinggaishuo]. *Yuyan Jiaoxue yu Yanjiu* [Language Teaching and Linguistic Studies] 3: 79-86.
- Narrog, Heiko. 2012a. “Beyond Intersubjectification: Textual Uses of Modality and Mood in Subordinate Clauses as part of Speech-act Orientation.” *English Text Construction* 5(1): 29-52.
- Narrog, Heiko. 2012b. *Modality, Subjectivity and Semantic Change: A Cross-linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Narrog, Heiko. 2015. “(Inter) subjectification and Its Limits in Secondary Grammaticalization.” *Language Sciences* 47: 148-160.

- 朱冰 (2018) 「『言うべきことは私が思うこと』——中国語の談話標識“应该说”の構文化と多機能性——」, 『日本認知言語学会論文集』第18巻, 日本認知言語学会, pp. 196-208.
- Traugott, Elizabeth C. 1995. “Subjectification in Grammaticalisation.” In *Subjectivity and Subjectification*, ed. by Dieter Stein, and Susan Wright, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. 2003. “From Subjectification to Intersubjectification.” In *Motives for Language Change*, ed. by Raymond Hickey, 124-139. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. 2010. “(Inter) subjectivity and (Inter) subjectification: A Reassessment.” In *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, ed. by Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens. 29-71. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Traugott, Elizabeth C. 2022. *Discourse Structuring Markers in English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth C. 2024. “Rethinking the Relationship between Subjectification, Intersubjectification, and Textualization from a Constructionalist Perspective.” *Cognitive Semantics* 10: 1-32.
- Traugott, Elizabeth C., and Richard Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

The (inter)subjectification and textualization in the development of Chinese discourse marker *yīnggāishuō*

ZHU, Bing

This paper investigates the processes of subjectification, intersubjectification, and textualization—and their interrelations—in the diachronic development of the Chinese discourse marker *yīnggāishuō* (lit. ‘should say’). Building on Traugott’s (2022, 2024) recent reconceptualization of subjectification, intersubjectification, and textualization, which treats the three as processes of “equal standing” that may operate simultaneously, this study re-examines my earlier diachronic analysis of the emergence of *yīnggāishuō* (Zhu 2018) from these three perspectives. The findings suggest that these processes did not unfold in a fixed, sequential order; rather, they likely progressed in parallel, partially overlapping with one another. As Traugott (2022: 197) argues, subjectification, intersubjectification, and textualization are “not mechanisms but processes by which meanings are used and reinterpreted over time,” and imposing a unidirectional trajectory on them may therefore be inappropriate. In this light, it may be more accurate to conceptualize these processes as epiphenomenal dimensions of semantic–pragmatic change, whose order of emergence is variable rather than predetermined.